The University of Osaka
Institutional Knowledge Archive

Title	海外大学の中国高校卒業生リクルート戦略 : 中国大学統一入学試験「高考」成績の活用をめぐって
Author(s)	孫, 成志; 藤井, 翔太; 石川, 真由美
Citation	多文化社会と留学生交流 : 大阪大学国際教育交流センター研究論集. 2013, 17, p. 3-17
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/50740
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka

『大阪大学国際教育交流センター研究論集　多文化社会と留学生交流』第17号（2013）

海外大学の中国高校卒業生リクルート戦略
ー 中国大学統一入学試験「高考」成績の活用をめぐって ー

孫　成志*・藤井　翔太**・石川　真由美***

要　旨

本稿では、高等教育のグローバル化に伴い、日本の大学においても入試制度改革に向けた機運が高まりつつある状況を踏まえ、中国の全国統一大学入学試験である「高考」成績の国際的な活用について考察する。具体的には、「高考」の概要と、現在留学生の選抜を行う際に「高考」の成績を参照にした海外の大学の新しい動きなどを紹介するとともに、「高考」を導入するメリット及び注意すべき点を示し、日本の大学において「高考」による学部留学の条件として採択する可能性を検討する。中国人学部留学生の選考に「高考」の成績を利用する海外の大学が増加している中、最大の留学生派遣国である中国から成績優秀者を受け入れるための一つの判断基準として、日本の大学が「高考」を活用する可能性を模索したい。そして、入学後の教育内容だけでなく入試制度のグローバル化が避けられない状況が出現しつつある中で、留学生の受け入れに、海外の国内入試制度を参照・活用することの是非を問うことで、日本の大学入試制度の改革への視座を提示する。

【キーワード】留学生、高等教育、大学入試、中国、「高考」

1　はじめに　「高考」とは何か？

中国の全国統一大学入学試験（原語：全国普通高等学校招生入学考試）、通称「高考」は、世界最大の留学生派遣国であり、日本に最も多くの留学生を送る中国において、中等教育修了時点での学習達成度を測る試験である。900万人が受験するという世界最大規模の大学入学試験であるが、日本における大学入試センター試験同様に、基本的には中国国内の大学が中国国内の学生を選抜し入学させるための制度である。その一方で、近年、海外の大学が留学生の選抜を行う際に「高考」の成績を参照にするなど、国外の教育機関も「高考」に注目し、利用するようになってきた。本稿は、この「高考」に焦点をあて、その概要だけでなく、世界の大学のグローバル化と優秀な学生の獲得競争、日本の大学国際化や入試改革といった動きのなかで検討する。そして、グローバル化が進む国際的な高等教育の状況を視野にいれながら、日本の大学入試制度改革の可能性についても示唆したい。

「高考」は、基礎教育と高等教育間の架け橋として、大学の新入生選抜、中・高等学校の教育・運営に対する調整及びガイドの役割のみならず、教育系統の統合、社会安定の維持などの重要な役割を担っている（劉2011）。また、日本と異なって大学や専攻ごとに入試が分かれておらず、一回の「高考」で進学先が決まるため、「高考」の日には中国全土が静かになるといわれるほど社会全体から注目される事業である。近年、この国内入試である「高考」が高等教育グローバル化の中で新たな意味づけを与えられ、国境を越えた学生選抜、すなわち中国国外の大学が中国人（学部）留学生の受け入れの拡大を目指して積極的に利用しようとする動きが見られる。オーストラリアやシンガポール、

* 大阪大学大学院言語文化研究科博士後期課程・大連理工大学外国語学部講師
**大阪大学国際交流オフィス特任研究員　***大阪大学国際交流オフィス教授

フランスの大学などで、出願時に「高考」の成績提出を義務づけ、「高考」の成績を選考の資料とする例がある。これにはシドニー大学やシンガポール国立大学など、留学生の受け入れに実績のある著名校も含まれる。また、フランス政府は留学ビザを申請にあたって「高考」の成績提出を義務づけるなど、入国審査のために使われることもある[1]。このような諸外国の状況と比較すると、日本の大学においては、このような海外の動向を注視する様子はみられるものの[2]、中国国内の大学入試制度「高考」及びその成績を、学部留学生の選抜条件として本格的に活用する事例について見聞きすることは殆どない。

従来「高考」など中国の大学入学者選抜試験に関しては、選抜方式の変遷等に関する先行研究がある。例えば、大塚（2007）が「高考」の歴史的変遷及び1990年代の状況について詳細な分析を行ったほか、南部（2005, 2006）は1990年代以降の改革動向、特に大学入試「推薦入学制度」の変遷を分析している。さらに、石井（2007）及び南部・渡辺（2012）は、中国における大学入学者選抜方法の多様化が東アジア諸国との比較という観点から検討されている。

このような従来の研究では、国際的な入試制度の比較も含めて、「高考」制度の位置づけや変化が、中国社会という文脈において、高等教育に対する人材育成の観点から検討されてきた。一方、本論は、高等教育のグローバル化、日本の大学にとっての国際化や学生の多様化といった観点から「高考」に着目する。すなわち、海外において優秀な外国人（中国人）留学生を選抜する上で指標の一つとして活用される例とその意義、日本の大学にとっての課題を中心に検討する。このような文脈においては、「高考」という中国独自の大学入試制度は、ナショナルでありながらグローバルな汎用性をもつ可能性が示唆される。

くしくも、東京大学の濱田純一総長が2012年初頭に秋入学への移行検討を表明して以来[3]、大学の国際化と学生の留学推進、入学時期と就職活動について、ギャップタームの検討など様々な論議を呼んでいる。一方で大学のグローバル化への社会的要請は、単に入学時期だけにとどまる問題ではなく、入学試験制度を含むいわゆる高大接続の検討も含んだ改革に発展する兆しがある。2012年6月に京都大学が高大接続を意識した独自の入試制度の導入を検討していると発表するなど[4]、既存の日本の大学入試制度に対する改革の機運、とくによりグローバルな入試制度の必要性は確実に高まっている。このような改革を進めていく上で、日本に最も多くの留学生を派遣している中国の大学入試「高考」に精通し、その活用法について検討することは、日本の大学に有益な情報をもたらす可能性を秘めている。

一方、2008年に政府が発表した留学生30万人計画のもと、外国人留学生の受け入れ数増加と大学国際化の一層の推進を目指す政策が実施されている。しかしながら、現在まで大阪大学を含む日本のいわゆる研究大学においては、学部留学生の数・割合は極めて些少にとどまっている。例えば、大学の国際化と留学生の受け入れの重点大学と言える、2009年開始の「大学の国際化のためのネットワーク形成推進事業（グローバル30）」に採択された、いわば日本の大学国際化のモデルと言うべき13大学においても、学部留学生の比率は2パーセント程度で、学部における教育環境の多様性（ダイバーシティ）の欠如がグローバル人材教育を推進する上で、ひとつの課題となっている。東京大学は2009年時点で277人（1.95%）である学部留学生を2020年には350人（2.5%）に増やす目標を掲げ[5]、大阪大学においても学部留学生の割合の飛躍的な増加のための検討がなされている。

学部の留学生、しかも優秀な海外の学生受け入れをすすめることは、これまで主に大学院における留学生教育に実績のある研究大学院大学にとっては、大きな挑戦であり課題である。学部において単位取得し卒業するためには、高い日本語能力が要求されるため、従来、日本の大学は日本語学校の卒業生で十分な日本語の能力をもつ者を入学させてきた（横田2012, p.81）。「留学生30万人時代」においては、従来の日本語学習者層を越えたより幅広い人材プールから学生を受け入れることが、より優秀な学生を取るための課題である。一方で、外国人留学生の増加は、選考・事務手続きの増大や煩雑化にも繋がり、より効率的なシステム

の構築が求められている。留学生の基礎学力に関するデータを入手することは、優秀な学生を獲得する上で非常に重要である。

英語による授業の拡大やコースの設立がひとつの方法で、コースや新学部の設立が国内で相次いでいる。これらは日本語能力という日本留学を目指す外国人学生にとってのハードルを下げることとなり、優秀な外国人留学生、特に大学院に比べて割合が低い学部留学生の増加に繋がることが期待される。しかしながら、現在の高等教育のグローバル化と競争の激化のもとでは、英語による学位プログラムを作ったからといって、海外の高校を卒業した優秀な学生を簡単にリクルートできるという状況にはない。世界の大学は様々な動機から、留学生の受け入れを推進し、広報や出願方法の見直しなどの努力を重ねている。海外における「高考」利用はまさにこのような例にあたる。

本稿の構成は、まず「高考」に関する概要を紹介した後に、中国人留学生の動向の変化、および海外の大学の「高考」への対応について分析する。その上で、日本の大学における「高考」活用の可能性について考察し、最後に日本の大学入試制度の現状について再検討する。外国人留学生が増加し、入試制度のグローバル化が避けられない状況が出現しつつある中で、海外の国内入試制度（「高考」）を活用することの是非を問うと同時に、教育の国際化が進展する時代における日本の入試制度改革の可能性について展望する。

2　全国統一大学入学試験（「高考」）の変遷と現状

本章では中国における全国統一大学入試「高考」の概要を紹介する。改革開放政策の実施以降、中国における大学進学率は急激に増加してきており、「高考」の重要性も高まってきている。そこで以下では、受験者数と合格率、受験の流れ、地域別の合格ラインについて具体的に解説する。

2-1　受験者数と合格率

1949 年の中華人民共和国成立から 3 年後の 1952 年に、全国統一大学入学試験「高考」は初めて実施された。その後、1966 年から 1976 年の文化大革命の間に中断されたことはあったが、1977 年に復活し、現在に至るまで全国統一大学入試として実施されてきた（大塚 2007）。

表 1　「高考」の受験者数（2003～2012 年）[6]

年度	受験者数（万人）	合格者数（万人）	合格率
2003	613	382	62.3%
2004	729	447	61.3%
2005	877	504	57.5%
2006	950	546	57.5%
2007	1010	566	56.0%
2008	1050	599	57.1%
2009	1020	629	61.7%
2010	946	657	69.5%
2011	933	675	72.3%
2012	915	－	－

表 1 は、2003 年からの過去 10 年間の「高考」の受験者数や合格率を示したものである。受験者数は 2008 年にピークの 1050 万人に達した後、4 年連続で減少したが、大学への合格率は近年上昇を続け、2012 年は 75%程度の見込みである。

なお、2009 年から「高考」の受験者数が減少してきた背景には、以下の 3 つの要因があると思われる。

1）最も大きな理由に、大学受験の適齢（18－22 歳）人口の減少がある。2010 年 7 月に発表された『国家中長期教育改革・発展計画綱要（2010－2020 年）』によると、2008 年に大学受験の適齢（18－22 歳）人口はピークの 1.25 億人を迎えたあと、2009 年から 2020 年前後まで連年減少の傾向になり、2020 年は 30%減の 8250 万人になると予測されている。なお、中国の 18～22 歳総人口に占める大学進学希望者の割合は、1999 年の 5%から 2007 年の 23%へと急増しており、2020 年には 40%近くに達する見込みである（紀 2011，p.8）。

2）次に、近年の中国では、高等教育機関で教育を受けた人材が急増したため、高学歴の若者が就職難に陥っている。地方の大学を卒業しても就職が難しいた

め、一流大学に進学できない高校生は、大学よりも専門学校に進学したり、就職したりするため、「高考」を諦める学生が増えている[7]。

3）高校卒業後に海外留学する学生が増加している。経済発展にともなって中流階級層が増加し、親世代より良い教育を受けさせようと、子供の海外留学を支援する家庭が増えてきたことや、海外の大学への留学ビザの申請条件が緩和されていること[8]が、海外留学増加の背景である。なお、中国における海外留学増加の詳細に関しては、第3章で改めて記述する。

2-2　受験から入学までの流れ

＜受験日及び受験科目＞

2003年以来、「高考」は毎年6月7日と8日[9]に全国で実施される。受験科目は、中国内陸部31省（直轄市・自治区）のうち、上海市・江蘇省・浙江省・海南省以外の27省（直轄市・自治区）は、国語、数学（文/理）、外国語、総合科目（文/理）という「基礎科目3＋総合科目1」の4科目（表2）で実施され、満点は750点である。なお、各科目のテスト内容は、省（直轄市・自治区）によって異なる場合がある。

表2　中国「高考」の受験日・受験科目及び配点

受験日	試験科目	時間	配点
6月7日	国語	9：00-11：30	150点
	数学（文/理）	15：00-17：00	150点
6月8日	総合科目（文/理）	9：00-11：30	300点
	外国語	15：00-17：00	150点

＜出願の時期と方法＞

志望校は自由に選択し、第1希望、第2希望…というように複数出願することができるが、日本のように各大学が個別に実施する2次試験がないため、「高考」の試験結果のみで合否が決まる。そのため、受験生は慎重に志望校や選考を選択しなければならない。現在、省（直轄市・自治区）ごとに出願方法が3種類ある（表3）。

表3　出願の時期と方法

出願の時期	方法	地域
「高考」の前（5月中旬）	過去数年分の各大学各専攻の合格ライン[10]を確認し、模擬試験の結果と照合	上海市・北京市（2ヶ所）
「高考」後、成績発表の前（6月中旬）	過去数年分の各大学各専攻の合格ラインを確認し、自己採点の結果と照合	天津市・山西省・遼寧省・黒竜江省・河南省・新疆ウイグル自治区（6ヶ所）
成績発表後、各大学の合格ラインが発表される前（6月末）	過去数年分の各大学各専攻の合格ラインを確認し、実際の成績と照合	他の地域（23ヶ所）

なお、中国教育部の統計データ[11]によると、2012年4月現在、中国における高等教育機関数は2,138校であり、そのうち、4年制の「本科」大学は841校、2～3年制の「専科」学校は1,297校である。そして、「本科」大学841校の頂点に、最も入学することの難しい「985プロジェクト」（39校）と、「211プロジェクト」に選ばれた112校の中国国家重点大学[12]がある。

＜受験生への成績通知日＞

各省（直轄市・自治区）によって異なるが、6月下旬から受験生は受験番号で各省（直轄市・自治区）の教育委員会に指定されたウェブサイトで個人の成績を照合することができる。

＜各省（直轄市・自治区）別の合格ラインの発表＞

中国の4年制課程（学部）は「本科」大学と呼ばれるが、「高考」の点数により、「一本」（国家重点大

学)、「二本」(地方大学)と「三本」(私立や専門学校など)の3つのレベルに分類されている。「高考」の後、各省(直轄市・自治区)の教育委員会はその年の受験者数や大学の募集希望などに基づき、各大学の合格ラインを決める指標となる、文系、理系別の最低合格ラインを発表する。ここでは、2012年度北京市の各レベルの大学の合格ラインを例として挙げる(表4)。

表4　2012年北京市における大学レベル別の最低合格ライン

理／文系	レベル分け	合格ライン(満点750点)
理系	一本線[13]	477
	二本線	433
	三本線	402
文系	一本線	495
	二本線	446
	三本線	416

＜合格通知・入学＞

合格通知書は、7月上旬から8月下旬に、各大学の入試担当課から直接受験生に郵送される。そして、入学式は、殆どの(本科)大学において、8月の最終週か9月のはじめの月曜日に行われる。

2.3「高考」の特徴ー出身地域による合格ラインの違い

各省(直轄市・自治区)の教育委員会による最低ラインが公開された後、各大学はこの最低ラインを基準にし、各校の合格ラインを公表する。しかし、教育水準の地域格差を制度面から是正するため、合格ラインは受験生の戸籍／出身地域によって異なる。表5は2011年地域別の「北京大学」の合格ラインである。同じ北京大学に入学するのでも、合格基準の高い山東省の文系が656点、逆に合格基準の低い遼寧省が629点と、学生の出身地によってかなりの開きがある。

表5　2011年地域別の「北京大学」の合格ラインと入学人数(抜粋)

地域	理系(点)	入学者数(人)	文系(点)	入学者数(人)
北京市	653	215	636	103
天津市	677	39	640	29
遼寧省	672	50	629	34
黒竜江省	687	21	635	17
吉林省	683	32	636	29
山東省	682	43	656	29

さらに、中国の大学は学生募集を行う際、各学部／専攻がそれぞれ「どの省から何人を入学させる」という学生募集枠を設けている。そして、その枠を前提に合格者を決めるため、一つの大学の学部／専攻でも省ごとに合格点が異なる。つまり、ある専攻はA省では学生を募集してもB省はゼロ募集という場合には、B省の学生はどんなに成績が良くても希望の専攻には進めない。

3　高校卒業生による海外留学[14]の新しい動き

本章では中国における最新の海外留学動向を検討する。前章では、「高考」の受験者数は2009年にピークを迎えた後、それ以来減少に転じている背景には、海外の大学への留学を希望している高校卒業生の著しい増加傾向があると述べた。そこで以下では、高校卒業生に焦点をあて、中国における海外留学の新しい動きと、学生の留学に対する意識を分析する。

3.1　高校卒業生による海外留学の新しい動き

2012年9月に中国社会科学文献出版社が発表した『国際人材青書：中国留学発展報告』によると、2011年中国の海外留学人数は33.97万人、世界の留学生人数の14%を占め、国籍別で世界一の送り出し国となった。そのうち、学部留学を目指す高校卒業生の留学生数は全体の22.6%に相当する7.6万人となり、とくに2008年以来、増加が著しい。これだけ多くの留学生を生んだ背景には中国経済の発展と同時に、需

要の急増に比べて国内に十分な水準に達する高等教育機関が不足しているという事情もある。そして、各国の留学ビザ緩和が留学をさらに促進させており、特に2008年に世界金融危機が発生して以降は、先進国の多くの大学は経済的理由から積極的に中国等からの留学生の受け入れを増加させた。

このように国内外の状況の変化の結果、従来は大学卒業後の進路として選択されていた留学が、高校卒業生の卒業後の進路選択において現実的な選択肢になってきた。そのことを示す具体的な動きとしては、海外の大学入試受験者数の増加、海外へ留学する中国人学生の低年齢化、そして私費留学生の増加による留学の大衆化の3点が挙げられる。

＜「洋高考[15]」受験者数の増加＞

中国教育部の統計によると、2010年度「高考」を辞退する高校生の受験生は、100万人近くに達し、そのうち約20万人が、海外留学のため国内の大学入試「高考」を辞退したという（中国教育在線 2011）。一方で、国内入試である「高考」の代わりに、海外の大学入試、いわゆる「洋高考」を受ける学生が増加している。

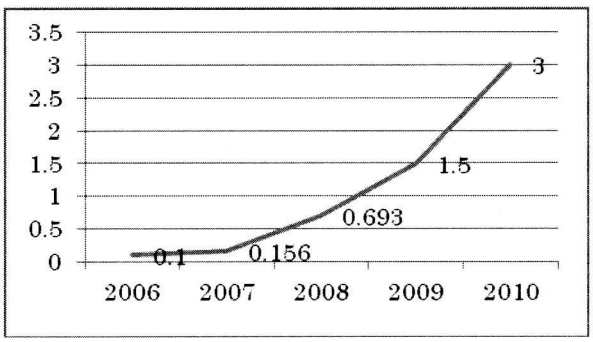

図1　2006－2010年中国国内のSAT受験者数（万人）

「洋高考」として最も知名度の高い米国の大学入試共通テストにあたるSAT（Scholastic Assessment Test）を例にすると、図1に示すように、2006年以降、SATを受ける中国国内の受験者数は著しい増加傾向にある。中国でのSAT試験場は香港のみであるが、2012年に同地で試験を受けた中国内陸からの受験者数が、少なくとも4万人に達するという[16]。

また、米国国際教育研究所（IIE）は、2012年11月12日に国務省教育文化局（ECA）と共同で、国際教育交流に関する年次報告書「2012年オープンドアー国際教育交流に関する報告書（Open Doors Report 2012: Report on International Educational Exchange）」を発表した。同報告書によると、2011－2012学年度に米国の大学へ留学した中国人の学生者数は、前年度と比べ23.1%増の194,029人に達し、国別で3年連続の最高となった。分野別でみると、ビジネス（28.7%）、工学（19.6%）、数学・コンピューターサイエンス（11.2%）が、中国人留学生の間で人気となっている。そして、そのなかでは大学院を目指す留学生が一番多かったが（表6）、高校卒業生による学部留学が前年と比べ30.8%の増となり、著しい増加傾向にあることが分かる。

表6　米国に留学した中国人学生の内訳
（「Open Doors Report 2012」より作成）

カテゴリー	2010-2011 (%)	2011-2012 (%)	増加率
学部生	56,976 (36.2%)	74,516 (38.4%)	30.8%
大学院生	76,830 (48.8%)	88,429 (45.6%)	15.1%
Non-degree	10,484 (6.7%)	12,690 (6.5%)	21.0%
Optional Practical Training	13,268 (8.4%)	18,394 (9.5%)	38.9%
計	160,558 (100%)	194,029 (100%)	23.1%

＜留学の低年齢化傾向＞

留学が大衆化するに従い、中国人留学生の年齢層は多様化してきた。従来、留学生の大半は海外の大学院教育を目指す学部卒業生であったが、近年学部入学を目指す高校生卒業生の割合も増加しており、留学生の低年齢化傾向が起きている。

＜「洋高考」受験者数の増加＞でも述べたように、「高考」辞退者は増加しており、特に北京、上海、南京の大都市では、海外留学のため中国国内での大学受験を辞退する高校生が、2010年以降毎年約20%増加している。また、ハルビン、長春、青島などの地方都

市においても、高校卒業生の海外留学が徐々に増加してきている[17]。例えば、瀋陽のある留学仲介会社のデータによると、2011年にこの会社を利用して留学手続きを終えた高校生は、前年度比16.5%増の387人に達したという[18]。

そして、留学の低年齢化の傾向は、TOEFLやIELTSなどの英語能力検定を受ける18歳以下の学生の増加傾向からも窺える。2011年中国国内におけるTOEFLの申込者数は、30万人を超え、前年度と比べ30%の増加が見られた。そのうち18歳以下の学生の割合は、前年度と比べ倍増したという[19]。

＜エリート留学時代の終了（留学の大衆化）＞

中国経済の高成長が続くなかで、各家庭の支払能力が向上したことが、留学ブームに拍車をかけ、「エリート教育」という位置づけだった留学が徐々に「大衆教育」に変化してきている。この変化を裏付ける最大の特徴として、私費留学の規模拡大と、一般的なサラリーマン家庭からの留学生が急増していることが挙げられる。中国教育部の統計によると、2011年中国海外留学者数は33.97万人となったが、そのうち、私費留学生が9割に相当する31.48万人を占めた[20]。

そして、2000年頃までは、海外留学を選ぶ高校生の多くは、国内での大学受験に失敗、もしくは合格する可能性がなかったため、やむを得ず海外の二流、三流大学を選んで私費留学をした場合が多かったが、近年は、国内「二本」や「一本」大学に進学できても、希望の専攻に入れなかった学生のなかに留学を選択する学生が増えつつある。また、上海・北京などの大都市では、高校入学時から中国国内での進学ではなく、質のよい海外の一流大学を目指す成績上位の高校生も増えているという[21]。中国国内での進学をやめた理由として、厳しい試験から逃げるためではなく、外国の異なる教育モデルや教育理念を体験したいと考える高校卒業生は少なくはない。例えば、中国の瀋陽にある東北育才外国語学校（高校）では、2008年から2011年の4年間に、QS世界大学ランキング100位以内の大学に進学した生徒は、卒業生全員の37.3%を占めているという[22]。

＜「高考」の成績を活用する試み＞

海外の大学や教育機関は、中国人留学生受け入れの拡大を目指し、奨学金制度の完備と、ビザ申請条件の緩和とともに、後述（第4章）のように、「高考」の成績を活用し、大学入学条件として採択するか検討している。その結果、国内入試（「高考」）の結果を利用して留学することが可能になってきている。

3.2 高校卒業生向けの海外留学に関する意識調査

中国教育部留学サービスセンター（CSCSE）は、質の高い教育に対するニーズの高まりや留学ルートの拡大による海外留学の低年齢化現象を受け、2010年9月19日から2011年4月12月の間、高校卒業生3550人を対象に、海外留学に関する意識調査を行った。その結果は以下の通りである。

1）専攻

経営学・経済学（44%）が最も人気がある。次いで、工学（21%）、ビジネスマネジメント（21%）、理学（14%）、医学（9%）、教育学（8%）、法学（6%）、文学（5%）、歴史学（3%）、哲学（2%）、農学（1%）の順となっている。

2）留学資金

「親戚や家族からの援助」が8割以上と最も多いが、「海外大学の奨学金を申請」が17%、「アルバイト」は16%、「海外留学ローン」は5%である。

3）留学に役立つ情報源

「中国国内の留学仲介業者」（46%）が最も多い。次いで、「先生や友達の推薦」（26%）、「中国国内の留学情報サイト」（26%）、「海外の大学の留学説明会」（15%）、「海外大学のHP」（14%）という順になっている。

以上、中国人学生の海外留学の低齢化とさらなる増加傾向をまとめた。海外の大学はそうした状況の変化に対応し優秀な中国人学部留学生を確保するため、様々な新しい試みを導入している。次章では、そのなかで、

中国国内の大学入試制度「高考」及びその成績の活用について考察する。

4　中国「高考」の成績を認める海外の大学

ここ数年、オーストラリアやシンガポールを中心に、海外の大学が中国の大学入学試験「高考」の成績を中国人学部留学生の選抜に利用するケースが増えてきた。以下、近年「高考」の成績を活用している大学を参考例としてあげる。

<「高考」成績を入学基準として採択した海外の大学>

オーストラリア：The University of Sydney、The University of New South Wales、University of South Australila、Monash University などの 14 大学

シンガポール：National University of Singapore、Nanyang Technological University、Singapore Management University

フランス：Université René Descartes、Université de Paris 7 Denis Diderot、Université Rennes

韓国：高麗大学、延世大学

カナダ：University of Toronto、University of Victoria

アメリカ：Brigham Young University

海外の大学側が求める「高考」成績の基準は、受験生所属の省（直轄市・自治区）の「一本線」（地方重点大学の合格ライン）以上との条件が殆どであるが、北京大学や清華大学のような中国の超有名大学の合格ラインと比べ、地方によってはかなり低い場合もある。また、「高考」の成績に加えて、高度な英語能力（IELTS6.5、TOEFL570 など）を要求する場合が殆どである。

以下では、海外の大学における「高考」活用の具体的な事例を紹介する。

スペイン教育部は、2008 年から中国の「高考」を認可し、「高考」の点数をスペインの大学入試の点数と変換できるように制度を整備した。その結果、中国の「高考」において、スペインの大学入試の合格ライン 5 点（満点 10 点）に相当する 450 点（満点 750 点）を取った中国人学生は、直接スペインの大学に入学申請を送ることができるようになった。2012 年 9 月現在、マドリッド工科大学（Technical University of Madrid）において、中国の「高考」成績を利用して入学した中国人学部生の数は、50 人余りに及んでいるという[23]。

また、カナダにおいては、約 5 割の大学が学部留学生の選抜条件として「高考」の成績を参照している。大学により、入学条件となる「高考」の成績が異なるが、カナダの公立大学に進学するには、「高考」において相当の成績を収めなければならない[24]。例えば、ウェスタンオンタリオ大学（University of Western Ontario）は、「二本線」以上を基準としているが、トロント大学（University of Toronto）の予科コースに入学するには、「一本線」（重点大学）合格ライン以上に達さなければならない。また、ブリティッシュコロンビア大学（The University of British Columbia）の場合、「高考」の英語において 120 点以上（満点 150 点）を取った学生は、IELTS5.5 に相当する英語能力を有すると見なされ、予備教育の条件を満たしていると判断している。

そして、オーストラリアでは、中国の「高考」の成績を採用している大学が 10 校を越え、オーストラリア主要 8 大学（たとえば Group of Eight 加盟大学）に限っても、シドニー大学（The University of Sydney）など 3 校が採用している。オーストラリアでは、「高考」用の基準が設定されており、主要 8 大学では「一本線」以上、その他の大学では「二本線」以上が一般的である[25]。「高考」の成績が入学基準として採択される以前には、中国の高校を卒業後、オーストラリアの大学に直接進学することは困難であり、予備コース（Bridging Course）と呼ばれるコースで、半年か一年、進学を希望する分野に応じた基礎科目や語学科目（英語）を履修した後に、学部課程に進学するのが一般的であった。したがって、「高考」の成績が入学基準として採択され、学部課程への直接進学が可能になることで、予備教育の時間と費用（1 年間約

20 万元＝260 万円）が節約できるだけでなく、中国国内の大学進学のための受験勉強と海外留学のための受験勉強が一元化されるため、オーストラリアの大学の「高考」への対応は、中国の高校生や保護者の間でも注目を集めている。ただ、「高考」の成績が採択されることにより、入学条件が緩和されるとはいえ、IELTS6.5 以上の英語成績を確保するのは、中国の高校生にとって難関の一つであることに変わりない。

以下では、オーストラリアで中国人留学生の選抜に「高考」を利用している代表例として、シドニー大学の事例を紹介する。

シドニー大学は、2011 年 8 月に、中国大学入試「高考」に関する報告書[26]を大学ホームページで公開し、その報告書に基づき、2012 年 2 月に中国による統一大学入試「高考」の成績に加え、英語試験（専攻によって異なるが IELTS 6.5、TOEFL iBT 80 点以上）、書類審査で入学の可否を決定するという画期的な制度を発表した。同報告書は、「高考」を数学や理科、英語などの基礎学力を測る優秀な全国統一試験だと評価している。その上で、全国 900 万人の「高考」受験者のトップ 10%に入る成績を収めた高校生を、中国国内における優れた学力を持つ人材と位置づけている。シドニー大学をはじめとする海外有力大学は、まさにこの「高考」の得点上位 10%の学生をターゲットにしている。そして、2012 年 2 月にシドニー大学は、海外の大学の中で初めて中国の省（直轄市・自治区）別の「高考」申請ラインを発表した（詳細は文末付録資料 I を参照）。

以上見てきたように、中国「高考」の成績を中国人留学生の選抜に利用する海外の大学が増加している。今後この傾向はさらに加速し、優秀な中国人高校卒業生が直接有名校に進学するチャンスが拡大することが予想される。では、なぜ、近年になって、海外の大学が中国「高考」の成績を自国の大学の入学条件として活用することになったのであろうか。

その背景には、前章で述べたように、家庭の収入の増加や人民元の値上がりなど中国内部の経済的要因に加え、高等教育の国際化の進展に伴う中国留学市場の拡大を指摘できる。また、国内に優秀な高等教育機関が不足していることも、よりよい学習環境を求めて向学心の強い学生たちにとって海外志向に走る理由となっている。中国青少年研究センターが発表した調査によれば、中国国内で海外留学に関心を持っている高校生の割合は 70.1%であり、韓国（70.8%）よりやや低いが、米国（66.9%）や日本（61.0%）よりは高い。そして、子どもが海外へ留学することに肯定的な考えを持つ親も 79.9%と高い割合となっているという[27]。

そして、中国の中等教育システム、及び、50 年余りの歴史を持つ全国統一大学入試システム「高考」そのものが、高校生の基礎学力を測るテストとして少しずつ評価されてきていることも窺える。シドニー大学学長マイケル・スペンス氏は、中国の「高考」を入学条件として採択した新政策の導入は、2 つの考慮事項、「現在の中国は、高い質の中等教育システムを持っていること」と「中国の大学入試制度「高考」は、高校生のもつ基礎知識を測ることができている」に基づいているという[28]。

つまり、世界トップレベルの大学で学習するための準備が出来ていると考えられる上位 10%の学生を受入れるために、「高考」という中国国内の大学入試システムを活用する意義が海外の大学で認められてきているのである。

5　日本の大学における「高考」活用の可能性

前章では中国人留学生の選考に「高考」の成績を利用する海外の大学が増加していると述べたが、それに比べると、日本の大学の対応は遅れ気味である。そこで、本章では、国際化が進む日本の高等教育の状況を踏まえつつ、日本の大学における「高考」活用の可能性について考察する。

5-1　日本の大学における中国人留学生の現状と課題

「高考」の活用について検討する前に、日本の大学における中国人留学生の現状を簡単に分析する。

2011 年に 33 万 9700 人の留学生を海外の高等教育機関に派遣し、世界最大の留学生派遣国となった中

国であるが、日本の大学における中国人留学生数も増加を続けている。日本学生支援機構（JASSO）の調査（図2）によると、2011年時点で中国人留学生数は87,533人、外国人留学生総数（138,075人）の64.3%を中国人留学生が占めている[29]。

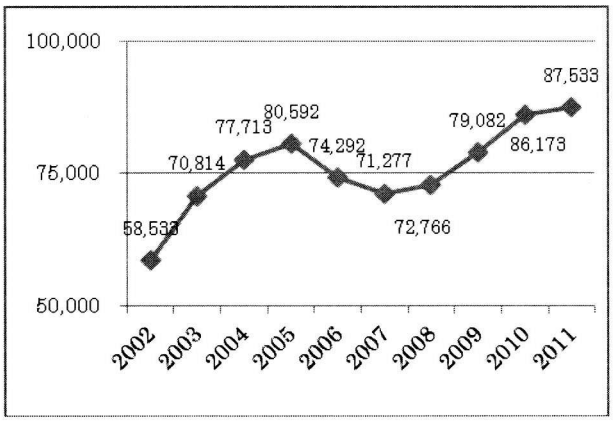

図2　日本の大学に所属する中国人留学生数
（JASSOの留学生統計から作成）

ここで重要な点は、第3章で述べたように、今後、学部留学生の増加が予想されることである。大学院生に関しては、「中国政府国家建設高水平大学公派研究生項目」など、中国政府の派遣プログラムが十分に整備されており、金銭面での支援が充実しているだけでなく、学力面でも一定水準に達した学生を選考することが比較的容易だと言える。一方で、学部留学生の選抜においては、SATや国際バカロレアのような国際的に通用性の高いテストの成績を提出してもらうか、もしくは日本の大学が独自に試験を実施することで、中等教育修了時点の基礎学力を測定するのが一般的であるが、大学院留学生の選抜に比べて手間がかかり、留学希望者と大学の双方にとって敷居が高い。特に研究大学の場合にはその傾向が顕著であり、例えばグローバル30に選出されている大学の場合では、表7に示すように、大学院における留学生比率が15%前後なのに対して、学部における留学生比率は高くても2.5%程度に留まっている。

表7　グローバル30大学における留学生比率（2009年度正規学生のみ）（Ishikawa 2011：202）

大学名		学生総数（留学生総数）		留学生総数の内訳% <学部生：大学院生>	学部レベルに占める留学生数%	大学院レベルに占める留学生数%
		学部生(留学生)	大学院生（留学生）			
		A+B (a+b)		a/(a+b)：b/(a+b)	a / (A)	b / (B)
		A (a)	B (b)			
国立	東北	18133 (1098)		12.11：87.89	1.21%	13.52%
		10997 (133)	7136 (965)			
	筑波	16797 (1359)		12.44：87.56	1.70%	17.39%
		9954 (169)	6843 (1190)			
	東京	28022 (2540)		9.50：90.50	1.71%	16.55%
		14128 (241)	13894 (2299)			
	名古屋	16268 (1291)		16.19：83.81	2.14%	17.48%
		9758 (209)	6190 (1082)			
	京都	22589 (1356)		11.87：88.13	1.20%	12.98%
		13387 (161)	9202 (1195)			
	大阪	23702 (1315)		20.84：79.16	1.75%	13.00%
		15693 (274)	8009 (1041)			
	九州	18967 (1449)		11.87：88.13	1.46%	17.79%
		11787 (172)	7180 (1277)			
私立	慶応	24803 (918)		47.71：52.29	2.20%	9.81%
		19909 (438)	4894 (480)			
	上智	11986 (292)		61.99：38.01	1.71%	8.10%
		10528 (181)	1458 (111)			
	明治	31733 (845)		75.27：24.73	2.17%	8.51%
		29278 (636)	2455 (209)			
	早稲田	54179 (2843)		41.12：58.88	2.60%	18.03%
		44893 (1169)	9286 (1674)			
	同志社	28428 (520)		61.35：38.65	1.23%	8.07%
		25937 (319)	2491 (201)			
	立命館	40114 (1147)		61.03：38.97	1.91%	12.76%
		36611 (700)	3503 (447)			

このように学部留学生の選抜を行う際には、中等教育修了時点での学習到達度を測定することが重要になるが、そこで浮上するのが「高考」活用の可能性である。大学進学を希望する中国の高校生の大部分が受験する「高考」は、彼らの学力を測る基準の一つとして有効に機能する可能性がある。第4章の最後で述べたように、シドニー大学などの海外の大学は「高考」を選抜のプロセスに組み込むことで、中国人高校卒業者の成績上位10%をスクリーニングすることを目指している。以下では、「高考」の活用が日本の大学にもたらす効果を具体的に考察する。

5-2 「高考」の活用によってもたらされるもの

「高考」を留学生選抜のプロセスに組み込む最大のメリットは、中国人学生の中等教育修了時点での基礎学力を一通り把握できる点にある。もちろん、「高考」の成績のみで、日本の大学に入学するのに十分な学力を有しているか判断することには危険性が伴うが、TOEFLや日本語能力試験のような外国語能力検定、大学が個別に実施するテストや面接、書類選考と適宜併用することで、中国人留学生の学力把握の精度を高めることができる。少なくとも「高考」の成績を参照することで、北京大学や清華大学のような中国国内の重点大学に合格することができる学力をもっているかどうか判断することは可能である。

また、留学生の視点から考えると、「高考」の成績が利用可能になれば、元来日本への留学を考慮していなかった中国人学生が、日本の大学への進学を選択肢に含める可能性が高まる。現状、欧米の大学に比べると、日本の大学の留学生選考や諸手続きは複雑で、「留学希望者に過度の負担を強いており」、それが日本への留学を躊躇させる要因の一つであると指摘する声もあがっている（文部科学省高等教育局学生・留学生課2012年）。「高考」導入により選抜のプロセスが簡素化されることで、大学と留学希望者双方にメリットがもたらされるだろう。

当然、「高考」を活用する上で注意すべき点も存在する。第1章で述べたように、中国の大学の合格最低ラインは各省（直轄市・自治区）ごとに異なっており、基準となる得点のラインをどこに引くのか慎重に検討する必要がある。また、現状の日本の大学の学部教育においては、一定レベルの日本語能力（最低でも日本語能力試験2級程度）の有無が大きなウェイトを占めており、英語能力とともに別個に日本語試験を行う必要があるだろう。しかし、「高考」の成績と併用することで日本語能力だけでなく、よりよく基礎学力の把握ができる可能性がある。特に、北京や上海、東北三省といった日本語教育が盛んな地域出身の学生に関しては、「高考」を通じた学力の把握が日本の大学への留学を促進する可能性が高い。その他にも、「高考」の活用をスムーズに行うためには、現地の教育委員会や留学仲介会社とのコンタクトをこれまで以上に密に行う必要もある。

以上のように注意する点も多いが、中国人留学生の選抜プロセスにおける「高考」の活用が日本の大学にもたらすものもある。実際に「高考」の成績を選抜に利用するかどうか、また、利用する場合に「高考」の成績にどの程度比重を置くかは個別の大学の方針に左右されるだろうが、中国人学生の学力を測る基準として「高考」に精通し、その活用の可能性について議論することには意義があるだろう。

6 終わりに

本稿では、中国の全国統一大学入学試験である「高考」の概要と、現在「高考」の成績を入学の条件に参考した海外の大学の動きなどを紹介した上で、対応が遅れている日本の大学における「高考」活用の可能性について検討した。高等教育の国際化が進展し、中国人学部留学生数のさらなる増加が予想される中で、中国における全国統一大学入試「高考」の成績は、中等教育修了時点での学力を判断する基準として採用する利点がある。特に、研究大学の場合には、欧米の一流大学との間で優秀な留学生の獲得競争が激化しているため、最大の留学生派遣国である中国から、学力上位10%に入る高校卒業生を選抜する意義は極めて大きく、そのスクリーニングを行う際の基準として「高考」を活用する可能性を模索する意義は大きい。

本稿の内容を要約すると以上のようになるが、最後に、「高考」活用の問題をより広い文脈に位置づけて今後の展望を示す。一点目は中国以外の国も含めて、諸外国で実施されている国内入試を留学生選抜に活用することの功罪、二点目は日本の大学入試制度の抜本的な改革である。

まず、一点目に関しては、本稿で検討した中国の「高考」は第一歩であり、将来的には他国の入試制度についても、「高考」と同様に活用の可能性を検討する余地が残されている。特に、中国以上に若年層の海外留学が一般化しており、また中国に次いで日本への留学生派遣数が多い韓国の場合には、日本の大学入試センター試験に相当する「大学修学能力試験」が存在しており、韓国人学生の学力を測る基準としてどの程度機能するか検討する意義はあるだろう。また、韓国の場合には、外国語高校を中心にして、中等教育における日本語教育が充実しており、国内入試の活用の検討が、優秀な学部留学生の獲得増加に繋がりやすい。

一方で、本来は留学生を入学させる大学自身が行うべき入学者選抜のプロセスに、海外の国内入試の成績を利用することの是非についても議論が必要である。入試とは単に「応募者を選抜するための試験」であるだけでなく、「その大学がどのような人材を求めているのか」を学生や社会に向けて示す機能も有している。教育の国際化の進展によって国境を越えた学生の交流が可能になっている現状があるからこそ、個々の大学は教育の特色や学風を国際的にアピールする必要が高まっている。基礎学力の判定を「高考」など他国の国内入試制度を参照することにしても、追加の筆記試験や面接試験など、その他の選考をより慎重に行わなければならないだろう。

そして、この問題は、二点目の日本の大学入試制度の抜本的な改革とも密接に関係している。冒頭で述べたように、東京大学の秋入学への移行検討は、高等教育のグローバル化と密接に結びついた問題であり、日本の大学入試制度の現状に一石を投じるものである。入学時期の移行（もしくは多様化）や、海外での積極的な試験実施など、教育のグローバル化に対応するための制度改革には、「高考」など海外の入試制度の現状の把握と参照が有意義なデータを提示する。また、こうした入試制度のグローバル化に向けた対応は、高大接続の強化など、日本の大学入試制度改革の抜本的な改革を促す契機にもなりうる。

国際的な競争力を強化し、日本の大学の魅力を世界に伝えるためには、外国人留学生・日本人学生と大学双方にとって、グローバルな観点から公正かつ明解な入試制度を構築する努力が不可欠である。本稿における「高考」活用の可能性に関する検討が、その一助となることを願う。

注

1. 『中国教育報』2012年10月30日第3版 ≪高考成绩海外认可，狼来了？≫
2. 例えば、九州大学の北京事務所「世界の有名大学は中国の「高考」利用を認め」 http://kyushu-ucn.net/html/____/____su_/2012/0521/1460.html
3. 東京大学「入学時期の在り方についての検討などの総合的な教育改革」 http://www.u-tokyo.ac.jp/gen02/fall.enrollment.html
4. 京都大学「高大接続型京大方式特色入試の一部導入に向けた検討の開始について」2012年6月22日 http://www.kyoto-u.ac.jp/ja/news_data/h/h1/news7/2012/documents/120622_1/01.pdf
5. 東京大学国際本部 『東京大学国際化推進長期構想（提言）』2010年3月 http://dir.u-tokyo.ac.jp/Archives/whitepaper/files/longtermplan/longtermplan.pdf
6. 中国教育在线（2012）《2012 年中国教育在线高招调查报告》 http://www.eol.cn/html/g/report/2012/index.shtml
7. 『人民日報』2012年6月13日≪应届高中生放弃高考人数4年累计超300万≫ http://edu.people.com.cn/GB/79457/18171176.html
8. 米在中国大使館の統計データによると、米国が中国人留学生に対して発行したビザは、2009年は8

万1800件、2010年は11万3800件、2011年は15万7,500件と増加傾向にあるという。

9. 江蘇省、浙江省、山東省、海南省は、毎年の6月7日－9日である。

10. 『高考志愿填报指南（筆者訳：大学出願案内）』 http://gaokao.eol.cn/html/g/zhiyuan/index.shtml

11. 中華人民共和国教育部「教育部批准的高等学校名单，新批准的学校名单」2012年4月24日 http://www.moe.gov.cn/publicfiles/business/htmlfiles/moe/moe_634/201205/135137.html

12. 独立行政法人　科学技術振興機構「中国国家重点大学一覧」 http://www.spc.jst.go.jp/education/university/univ_000.html

13. 「一本」大学に合格する最低の点数を「一本線」と呼ぶ。

14. 本稿では、中国の高校を卒業してから海外の大学に進学する高校卒業生の留学状況を検討するため、高校在学中に中・短期留学のケースは含まれていない。

15. 「洋高考」とは、海外の大学入学試験のことを指す。

16. 『新聞晨報』2012年10月7日≪SAT考试中国内地考生人数增长最显著≫

17. 『中国新聞網』2012年9月19日≪中国留学日益低龄化　放弃高考人数增加≫ http://gjjy.hbee.edu.cn/zhuanti/2012/0919/article_307.html

18. Study in Chain「中国、高校生の留学ブーム」 http://www.studyinchina.jp/school/2012-2/view294586.html

19. 中国教育在线（2012）《2011年出国留学趋势调查报告-第四节出国留学类考试变化》 http://liuxue.eol.cn/html/lxrep/c01s01.shtml

20. 中国人民共和国教育部「2011年度我国出国留学人员情况统计」2012年2月10日 http://www.moe.gov.cn/publicfiles/business/htmlfiles/moe/s5987/201202/130328.html

21. 『中国教育報』2010年6月12日第1版≪高中生出国留学人数逐年增加≫

22. 東北育才外国語学校HPより http://www.ycwgy.com/Article/zjwgy/bxyj/Index.html

23. 出典は注1と同じ。

24. 『北京考試報』2012年9月18日≪高考成绩成国外名校“敲门砖”≫ http://bjksb.bjeea.edu.cn/html/ksb/liuxuezhuanban/2012/0917/44840.html

25. 『北京日報』2012年11月1日≪盘点认可中国高考成绩的世界名校≫

26. The University of Sydney (2011) *Research on China's National College Entrance Examination (the Gaokao)* http://sydney.edu.au/ab/committees/admissions/2011/AEI_Gaokao_Report.pdf

27. 『半島晨報』2012年10月4日≪调查显示，八成父母赞成孩子留学≫ http://epaper.hilizi.com/bdcb/20121004/page_63291.xml

28. 『中国教育報』2012年10月30日≪高考成绩海外高校认可：国际化还是利益驱动？≫

29. 『平成23年度外国人留学生在籍状況調査結果』独立行政法人 日本学生支援機構（JASSO） http://www.jasso.go.jp/statistics/intl_student/data11.html

参考文献

The University of Sydney (2011). *Research on China National Colleague Entrance Examination (the Gaokao)* http://sydney.edu.au/ab/committees/admissions/2011/AEI_Gaokao_Report.pdf

Bohm, A., Davis, D., Meares, D., & Pearce, D. (2002). *Global Student Mobility 2025: Forecasts of the Global Demand for International Higher Education.* Sydney, NSW: IDP Education Australia

Mayumi Ishikawa. (2011). Redefining internationalization in higher education: Global 30 and the making of global universities in Japan. Willes, D.B., & Rappleye, J. *Reimqgtning Japanese Education: Borders, Transfers, Circulations and the Comparative* Province: Symposium Books. PP.193-223

石井 光夫（2008）『東アジア諸国における大学入試多様化に関する研究』平成17～19年度日本学術振興会科学研究補助金 基盤研究（C） 課題番号

17530548 研究代表者：石井光夫（東北大学高等教育開発推進センター）
王 麗燕（2010）「中国の全国統一入試における地域間格差」『アジア教育研究』2，アジア教育発展学会，pp.66-73
大塚 豊（2007）『中国大学入試研究－変貌する国家の人材選抜』東信堂
宮 玉婷（2012）「中国における大学入学試験制度改革の現状と課題－「自主学生募集」に焦点をあてて」『教育制度研究紀要』7，筑波大学教育制度研究室，pp.75-80
楠山 研（2005）「中国における大学入試改革の動向－地方・大学への権限委譲に関する一考察」『京都大学大学院教育学研究科紀要』51 京都大学 pp.128-141
楠山 研（2010）「中国における義務教育制度の弾力化と質保証」『比較教育学研究』41，日本比較教育学会，pp.49-62
中島 直忠（2000）『日本・中国高等教育と入試－二一世紀への課題と展望』 玉川大学出版部
南部 広孝（2005）「新入生募集制度改革」黄福涛（編）『1990 年代以降の中国高等教育の改革と課題』（高等教育研究叢書 81）広島大学高等教育研究開発センター，pp.89-97
南部 広孝（2006）「中国の大学入学者選抜における推薦入学制度の変遷」『大学論集』37，広島大学高等教育研究開発センター，pp.169-180
南部 広孝・渡辺 雅幸（2012）「インドと中国における大学入学者選抜制度」『京都大学大学院教育学研究紀要』58，京都大学，pp.19-42
文部科学省高等教育局学生・留学生課（2012）『我が国の留学生制度の概要 受け入れ及び派遣』 http://www.mext.go.jp/component/a_menu/education/detail/__icsFiles/afieldfile/2011/12/12/1286521_4.pdf
楊 雲（2009）『中国における高等教育の市場化と機械均等性』 博士論文 新潟大学
横田 雅弘（2012）「日本における留学生受入れの現状と展望」『学術の動向』17（2），財団法人日本学術協力財団，pp.74-82
李 守福（2001）「中国大学入試制度の改革」『大学教育研究』別冊 9，神戸大学大学教育研究センター，pp.41-45
劉 海峰（2011）「中国大学入試制度と基礎教育の関係について」『第 55 号 中国の初・中等教育の現状と動向』 独立行政法人 科学技術振興機構 http://www.spc.jst.go.jp/hottopics/1105elem_sec_education/r1105_liu.html
姜乃强（2010）《高中生出国留学人数逐年增加》《中国教育报》2010 年 6 月 12 日第 1 版
纪宝成（2011）《2020 年我国高等教育规模预测分析》《中国人民大学教育学刊》第 01 期
刘海峰（2007）《高考改革的回顾与展望》《教育研究》第 11 期
刘扬・孔繁盛・钟宇平（2009）《中国大陆高中生海外留学高等教育的专业选择及其影响因素》《高等教育研究》第 04 期
谈松华・夏鲁惠（2011）《适龄人口下降对我国高等教育的影响》《中国发展观察》第 9 期
中国教育在线（2011）《留学行业分析报告（2011 年版）》 http://liuxue.eol.cn/html/lx/Special/2011/lxfx/index.shtml
中国教育在线（2011）《出国留学趋势调查报告》
周金燕・钟宇平・孔繁盛（2009）《全球化背景下的教育不平等－中国高中生留学意愿影响因素的研究》《清华大学教育研究》第 06 期

参考 URL：最終確認日 2012 年 12 月 20 日
中華人民共和国教育部 http://www.moe.gov.cn
中国留学網 http://www.cscse.edu.cn
中国高等教育・学生情報 NET http://www.chsi.jp
中国国家留学基金管理委員会 http://www.csc.edu.cn
中国教育部留学服務中心 http://www.cscse.edu.cn
中国青少年研究会 http://www.cycra.org/
Science Portal China http://www.spc.jst.go.jp
日本学生支援機構（JASSO）http://www.jasso.go.jp

付録資料 I

シドニー大学が入学条件として採択した「高考」成績の合格ライン

（シドニー大学HP「Study at Sydeny」より　筆者作成）

NO	Province	Maximum Point	Entry Score 2012 年度	Entry Score 2013 年度
1	安徽省	750	547	577
2	北京市	750	524	495
3	重慶市	750	564	554
4	福建省	750	573	557
5	甘肅省	750	504	533
6	広東省	750	580	589
7	広西チワン族自治区	750	519	544
8	貴州省	750	516	539
9	海南省	**900**	671	668
10	河北省	750	581	572
11	黒竜江省	750	551	526
12	河南省	750	582	557
13	湖北省	750	571	561
14	湖南省	750	593	571
15	内モンゴル自治区	750	486	492
16	江蘇省	**480**	345	341
17	江西省	750	532	570
18	吉林省	750	548	529
19	遼寧省	750	535	563
20	寧夏回族自治区	750	500	489
21	青海省	750	430	433
22	?西省	750	543	556
23	山東省	750	570	582
24	上海市	**630/600***	468	438
25	山西省	750	570	539
26	四川省	750	533	518
27	天津市	750	519	549
28	新疆ウイグル族自治区	750	504	493
29	チベット自治区	750	485	490
30	雲南省	**750/772****	495	520
31	浙江省	**810**	571	606

*2012 年度より上海市は「総合能力測定科目」（30 点）を廃止し、「高考」満点が 600 点になった。
**2012 年度より雲南省は「学業水平測定科目」（22 点）を加えたため、満点が 772 点になった。